

2022年1月9日（日）上演⑨

東京都立駒場高等学校

「グレートマザー」

第57回関東高等学校演劇研究大会（東京会場）

生徒講評委員会 講評文

生徒講評委員会 担当委員

齋藤 翔海（東京都立片倉高等学校1年）

この作品は実に珍しいといえる。何故なら、物語の登場人物達は「役者、その本人役」で登場するからだ。演劇部を舞台にした高校演劇作品の場合、登場人物達は演劇部の部員達の自己投影、アバターである場合が多い。しかし、この劇の場合は演劇部のメンバー本人達が劇の中に登場するキャラクターとして、それぞれが背負っている心の枷を「地雷」として表現し、ぶつかり合いながらも全員が自分の「地雷」に向き合っていく物語に、何人もの生徒講評委員から「感動した」という意見が挙がった。

本編で何回か繰り返して行われる、演劇部の稽古という形の劇中劇では、本編全体にそのフレーバーを感じさせる『新世紀エヴァンゲリオン』など、他作品へのリスペクトが感じられる。劇中劇の中では何回やっても主人公のこうじを助けることができないため、他の演劇部のメンバーからは「助けられないじゃないか」という意見が出ている展開があったが、これは後に、母親から弾圧的な支配を受けているこうじ自身が自分の置かれた危機的な状況に対して自分自身から「助けて欲しい」と自分の気持ちを言わなければ解決できないという展開に繋がっていると講評で気づき、感嘆した。

照明卓や音響卓が舞台上に置かれている、フードを被って自分の演じる役を切り替える、四角のブロックで幾つもの場面を切り替えるなど、斬新かつ印象的な工夫が見られ、それらが劇の持つ力に効果的な影響を与えていたと感じた。

その複雑な劇の演出方法から、最初は劇の内容を理解するのが難しい作品であるという意見が挙がったが、物語全体を通して一つのメッセージ性を伝えようとしている姿勢を感じ取ったという意見も挙がった。本当に自分達が伝えたいことを伝えるために完成された劇であるといえる。

そのリアリティ、それぞれの「地雷」を解消するために向かっていく登場人物達の姿から感じられる青春、物語を通して役者から観客達に伝わる強いメッセージ性に圧倒される作品だった。

東京都立駒場高等学校演劇部の皆さん、たくさんの感動をありがとうございました。

